

あなたの街の
ドクターが
アドバイス



かゆみの原因はさまざまです

かゆみとは、「かきたいという欲望を起こさせる不快な感覚」

皮膚科を受診するきっかけの一つとして、「皮膚のかゆみ」があります。かゆみは「かきたいという欲望を起こさせる不快な感覚」と定義されています。じんましん、アトピー性皮膚炎、接触性皮膚炎、虫刺されなどは、時としてとても強いかゆみを生じます。これらの皮膚疾患によるかゆみは、末梢性のかゆみと呼ばれ、表皮と真皮の境界部のかゆみ受容体（レセプター）にかゆみ刺激が作用して神経が興奮します。この信号が、求心性（脳に向かう）C線維により大脳皮質まで伝達され、かゆみが認識されます。かゆみ刺激の中で最も重要で強力なものはヒスタミンです。これはC線維の末梢部のヒスタミン1（H1）レセプターに結合し、神経を興奮させます。このかゆみには抗ヒスタミン薬が有効です。じんましんには第一選択薬として、アトピー性皮膚炎には補助的治療薬として、治療ガイドラインで推奨されています。

皮膚にほとんど発疹がないのかゆみを感じることもあります。これは「皮膚そう痒（よう）症」と呼ばれ、その一部は甲状腺機能異常症、肝臓変、慢性腎不全、ホジキン病や内臓がんなどの悪性腫瘍などが原因で発症します。これらは中枢性のかゆみと呼ばれています。中枢性のかゆみをおこす物質はオピオイドペプチド（モルヒネ様物質）であるため、このかゆみには抗ヒスタミン薬はほとんど効果を示しません。

乾燥肌（ドライスキン）もかゆみを生じる大きな原因です。高齢者やアトピー性皮膚炎患者にみられるドライスキンでは、求心性C線維の末端が表皮の上方や角層直下にまで侵入していることが最近の研究で分かっています。このため、皮膚へのわずかな刺激が直接神経を刺激して、その信号が大脳皮質まで伝達されてかゆみを感じてしまいます。この場合には保湿剤によるスキンケアでドライスキンを手当することがかゆみの解消の助けになります。

お話してくださった先生



加藤直子皮膚科スキンクリニック院長

加藤直子 先生

北海道大学医学部医学科卒業。北海道大学医学部付属病院皮膚科研修医、助手を経て、米国マイアミ大学皮膚科研究員として留学。1989年から市立小樽病院皮膚科医長、1994年から北海道がんセンター（旧国立札幌病院）主任医長を経て、2010年加藤直子皮膚科スキンクリニックを開院。医学博士、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医。